

長岡京右京一条四坊十四・十五町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇六―一三

長岡京右京一条四坊十四・十五町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京右京一条四坊十四・十五町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび道路新設工事に伴う長岡京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

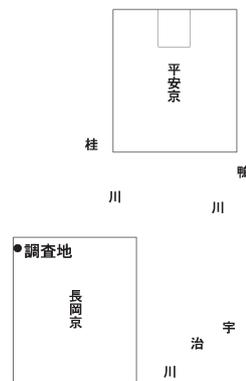
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 19 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 長岡京右京一条四坊十四・十五町跡
長岡京右京 879 次調査 (7AN-UIT2・UAR2 地区) |
| 2 調査所在地 | 京都市西京区大原野石見町 |
| 3 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 榎本頼兼 |
| 4 調査期間 | 2006 年 6 月 29 日～2006 年 9 月 11 日 |
| 5 調査面積 | 716 m ² |
| 6 調査担当者 | 能芝 勉・田中利津子 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図(縮尺 1:2,500)「石見」「粟生」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系 VI(ただし、単位 (m) を省略し、旧座標値を() に記した。) |
| 9 使用標高 | T.P.: 東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点(一級基準点)を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。ただし、建物・柵列については別に番号を付した。 |
| 13 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 遺物復元 | 村上 勉・出水みゆき |
| 16 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 17 本書作成 | 能芝 勉・田中利津子 |
| 18 編集・調整 | 児玉光世 |



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 周辺の調査	2
3. 遺 構	3
(1) 層 序	3
(2) 遺 構	7
1) 1区の遺構	7
2) 2区の遺構	12
4. 遺 物	12
1) 1区の遺物	12
5. ま と め	16

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区第1面全景（北から）
		2	1区建物1（東から）
図版2	遺構	1	1区第2面全景（北から）
		2	1区建物2・柵列3（北から）
図版3	遺構	1	2-1区全景（北から）
		2	2-2区全景（東から）
図版4	遺物	1	1区出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査地および周辺の調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	1区調査前全景（南から）	3

図4	1区作業風景（南西から）	3
図5	1区第2面遺構実測図（1：200）	4
図6	1区第1面遺構実測図（1：200）	5
図7	1区北壁・東壁断面図（1：100）	6
図8	土壌205実測図（1：20）	7
図9	土壌205糞出土状況（北東から）	7
図10	建物2・柵列3実測図（1：50）	8
図11	石組土壌2実測図（1：40）	9
図12	建物1実測図（1：50）	10
図13	2区遺構実測図（1：200）	11
図14	2004年度調査3トレンチおよび今回調査2区配置図（1：500）	12
図15	出土遺物拓影・実測図（22は1：8、30は1：2、他は1：4）	14

表 目 次

表1	周辺の調査一覧表	2
表2	1区遺構概要表	3
表3	1区遺物概要表	13

長岡京右京一条四坊十四・十五町跡

1. 調査経過

今回の調査は中山石見線道路新設工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は長岡京右京一条四坊十四町と十五町に該当し、調査は長岡京 R879 次調査¹⁾にあたる。調査地は京都市西京区大原野石見町地内に所在する。同じ中山石見線道路新設工事に伴う調査事例としては、2002 年度に今回調査地の南側で R746 次調査²⁾が行われ、また、2004 年度には今回調査地の北側で R831 次調査³⁾が行われている。今回の調査地は、この南北の調査地に挟まれた部分（1 区）と、2004 年度調査地の農道を挟んだ北側（2 区）で、鎌倉時代から室町時代の石見城跡に関連する遺構を中心に、中世の集落跡の全容が解明できると期待された。また、長岡京に関連する遺構や、旧石器・縄文時代から古墳時代にわたる大原野石見町遺跡の範囲に含まれることから、古墳時代以前の遺構も検出されると予想された。

調査の結果、1 区では古墳時代前期の土壌、長岡京期と推定される建物と柵列を検出した。

また、中世の柱穴や土壌なども検出したが、調査区全域が江戸時代後期頃に宅地整備に伴う削

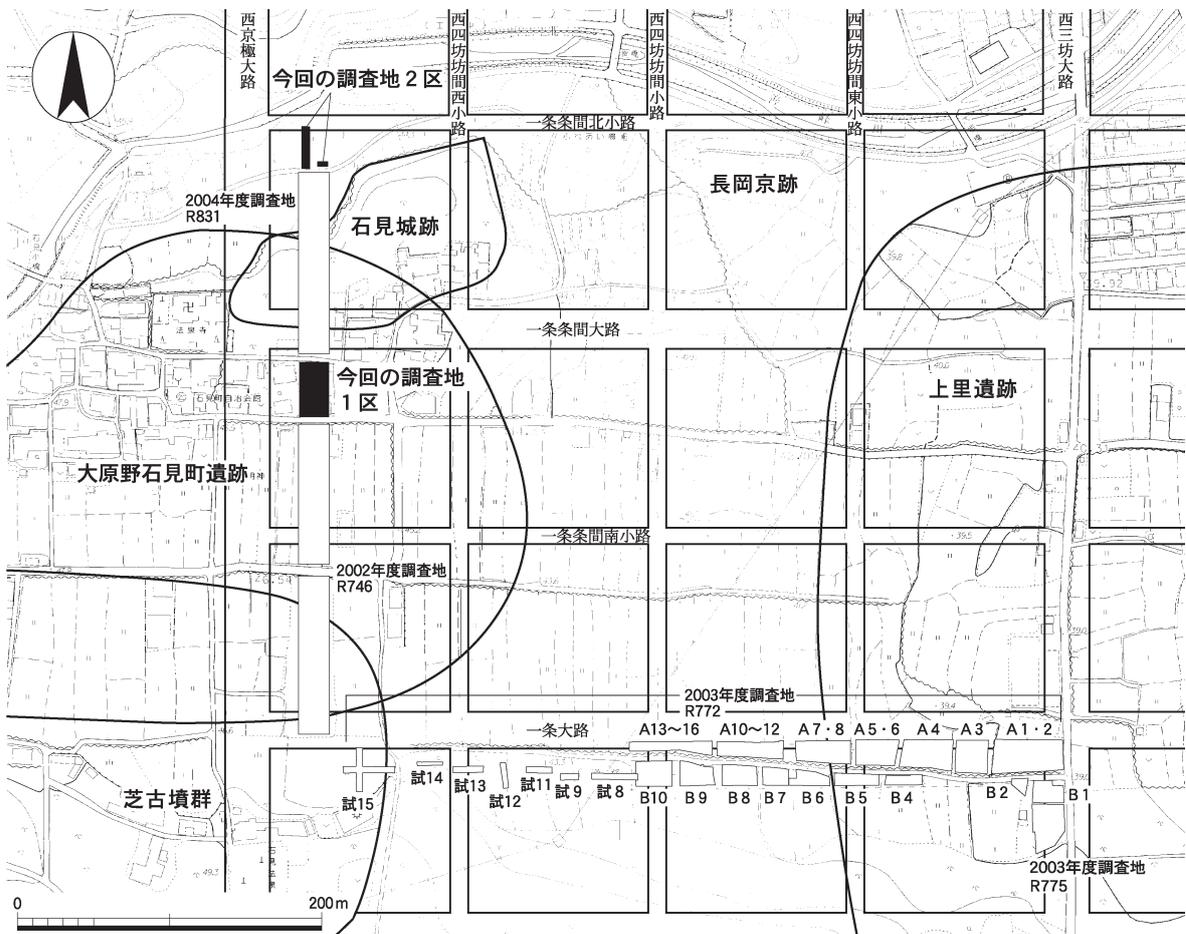


図1 調査地および周辺の調査位置図（1：5,000）

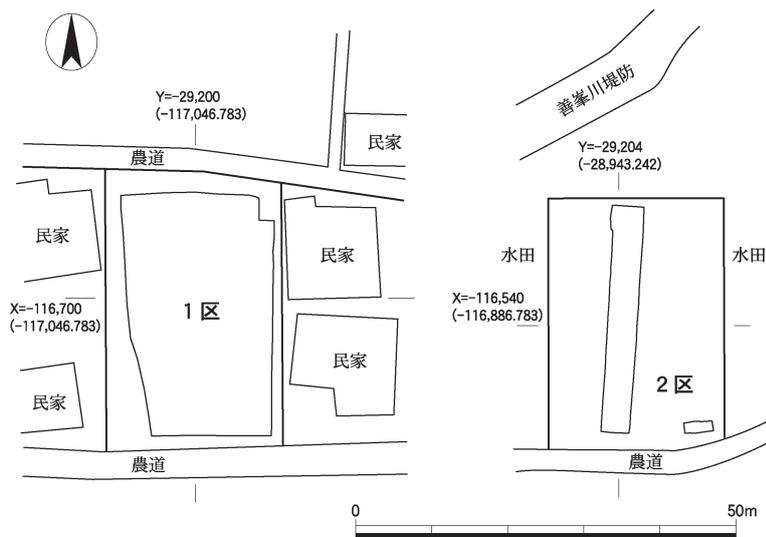


図2 調査区配置図 (1:1,000)

平を受けており、石見城に関連する具体的な遺構は見つからなかった。江戸時代の遺構は調査区の全域で検出した。前期の建物跡・井戸・石組土壇・屋敷境溝などである。

一方、2区では2004年度の調査で検出された旧善峰川の広がりや石見城跡に関連する遺構の広がりを確認するために、2004年度の調査の農道を挟んだ北側で2箇所の調査区

を設定した。調査対象地の中央に東西4m、南北30m、調査対象地の南端に東西4m、南北1mの調査区を設定し、それぞれ2-1区、2-2区とした。調査の結果、2箇所とも近現代の耕作土・床土の下は全面地山の砂礫層で、遺構の痕跡はなく、遺物も検出されなかった。

そのため、本報告書では主に1区の調査成果について報告し、2区については調査位置図・平面図・断面図などを記載するに留める。

調査は2006年7月29日から調査に伴う付帯工事および重機掘削を開始し、9月11日までに埋戻しと整地作業を行い終了した。

なお、調査期間中、2006年9月2日に地元向けの現地説明会を行った。

2. 周辺の調査

周辺の発掘調査事例としては、同じ中山石見線道路新設工事に伴い、前述の2度の調査が行われている。R746次調査では、縄文時代後期から弥生時代前期、古墳時代前期の流路などを検出したほか、長岡京の一条条間南小路南北側溝や鎌倉時代の集落跡が検出されている。また、R831次

表1 周辺の調査一覧表

調査地	長岡京調査回数	文献
西京区大原野石見町ほか地内	R746	『長岡京右京一条四坊十三・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-2 2003年
西京区大原野石見町地内	R772	『長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-3 2003年
西京区大原野石見町地内	R775	『長岡京右京二条四坊一町跡・上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-4 2003年
西京区大原野石見町314ほか	R831	『長岡京右京一条四坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-15 2005年



図3 1区調査前全景（南から）



図4 1区作業風景（南西から）

調査では鎌倉時代から室町時代の石見城に関連する建物跡を中心に、古墳時代の竪穴住居跡、長岡京期の可能性がある建物跡など多くの遺構が検出されたほか、縄文土器や弥生時代の石槍・石鏃なども出土している。また、2003年度には長岡京の右京二条四坊で2度の調査が行われている（R772調査⁴⁾・R775調査⁵⁾）。R772調査では、長岡京期の一条大路南側溝、西三坊大路西側溝と内溝、建物・柵列や、井戸、木棺墓などと共に、多数の古墳時代中期の竪穴住居や掘立柱建物などをはじめ、縄文時代から弥生時代の遺構・遺物を検出している。R775調査では、長岡京期の西三坊大路の路面・側溝・内溝、建物跡など、古墳時代後期から末期の建物群などの遺構を検出している。

3. 遺 構

(1) 層 序

1区の基本層序は、表土下約40cmまで盛土・耕土で、以下5cm程度の床土となる。調査区の北部では、その下層に5～10cmの中世期の薄い包含層ないし整地層が残存し、また、北東部では古墳時代の薄い包含層が認められた。調査区の中央部ではこれらの整地層はなく、直接地山の灰黄褐色の砂礫層となる。また、調査区の南部一帯は緩やかに地山面が下がっており、落込み4とした江戸時代後期の整地層であり、にぶい黄褐色の砂泥層が堆積する。

表2 1区遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代	土壙201・204～206	前期
	土壙223	後期
長岡京期	建物2、柵列3	2間×3間、南北棟(推定)
鎌倉時代～室町時代	柱穴、土壙210・217	
江戸時代	建物1、石組土壙2・72	前期
	井戸3・150、土壙12・51、屋敷境溝50、落込み4	中～後期

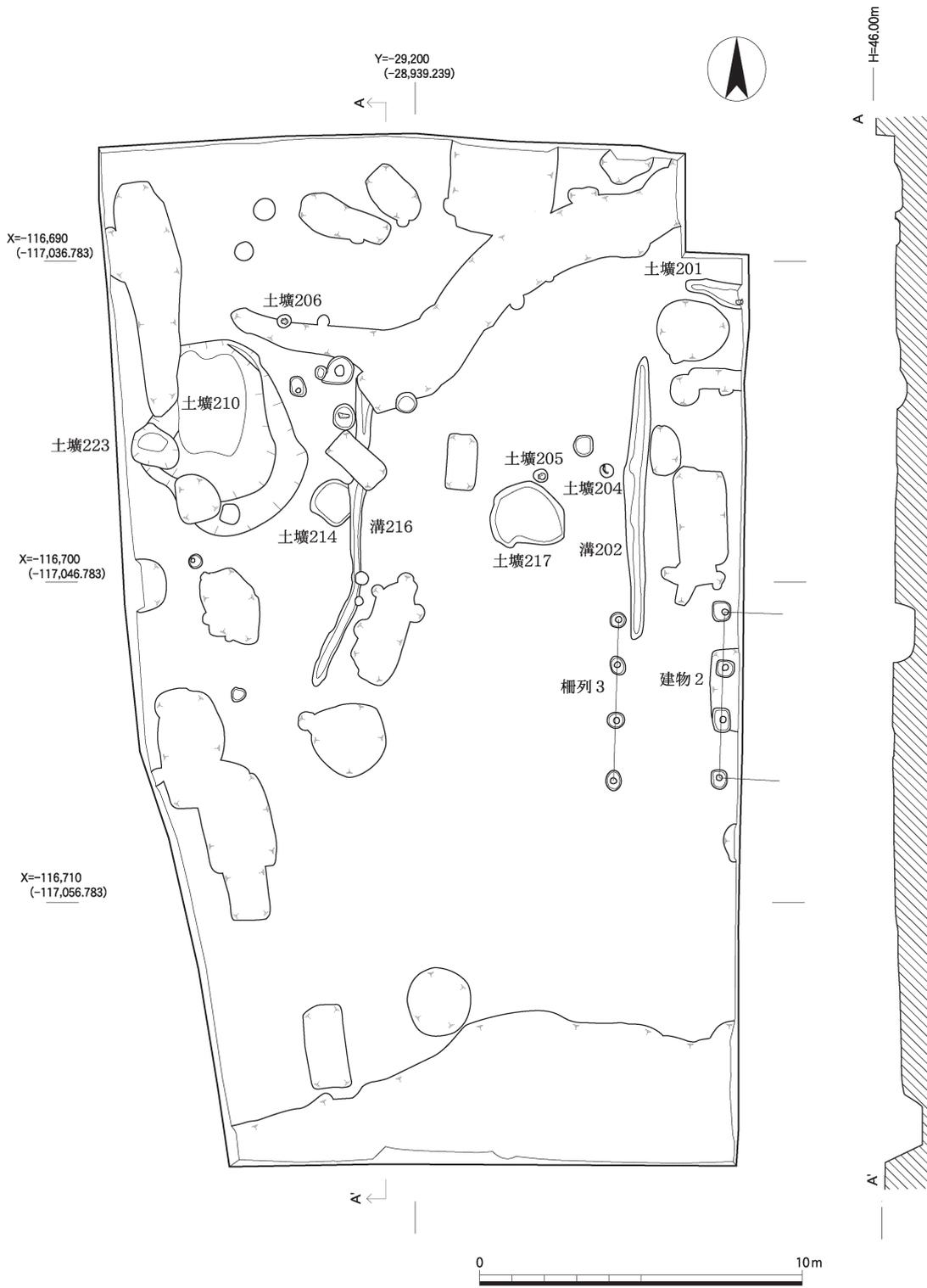


図5 1区第2面遺構実測図(1:200)

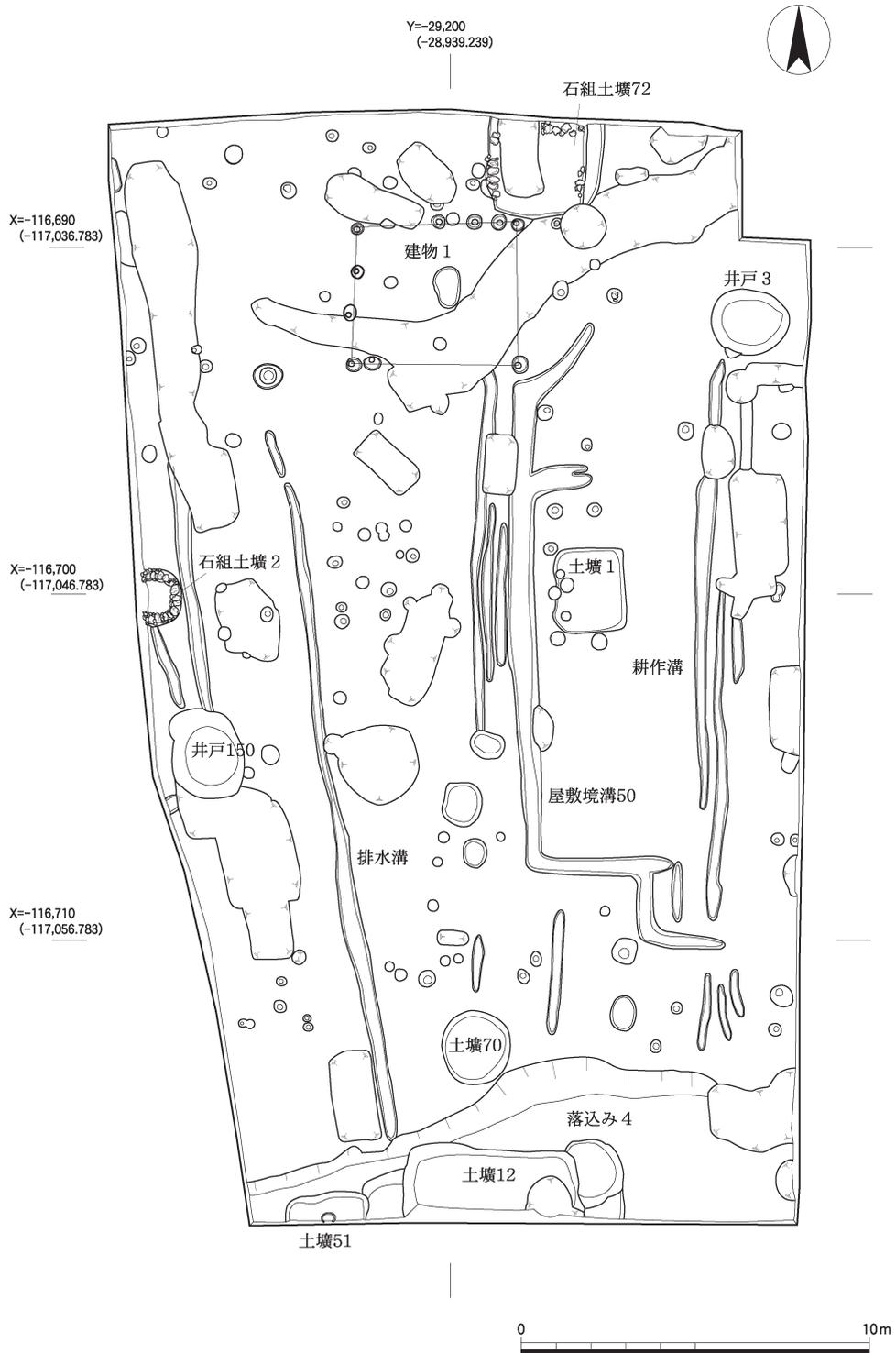
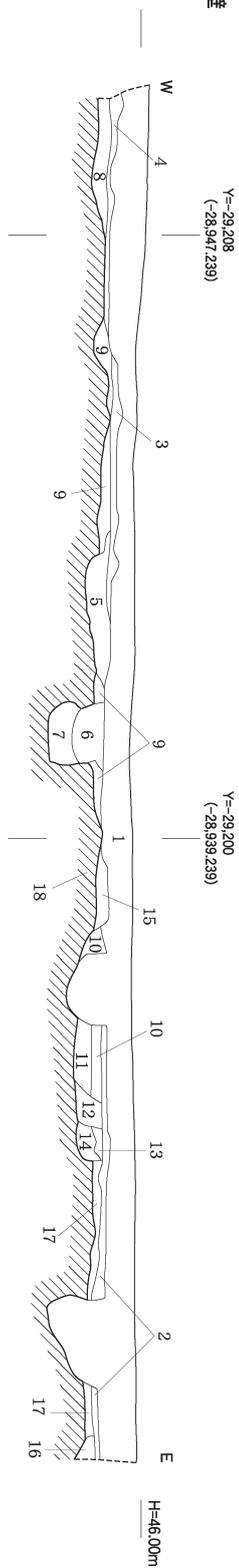


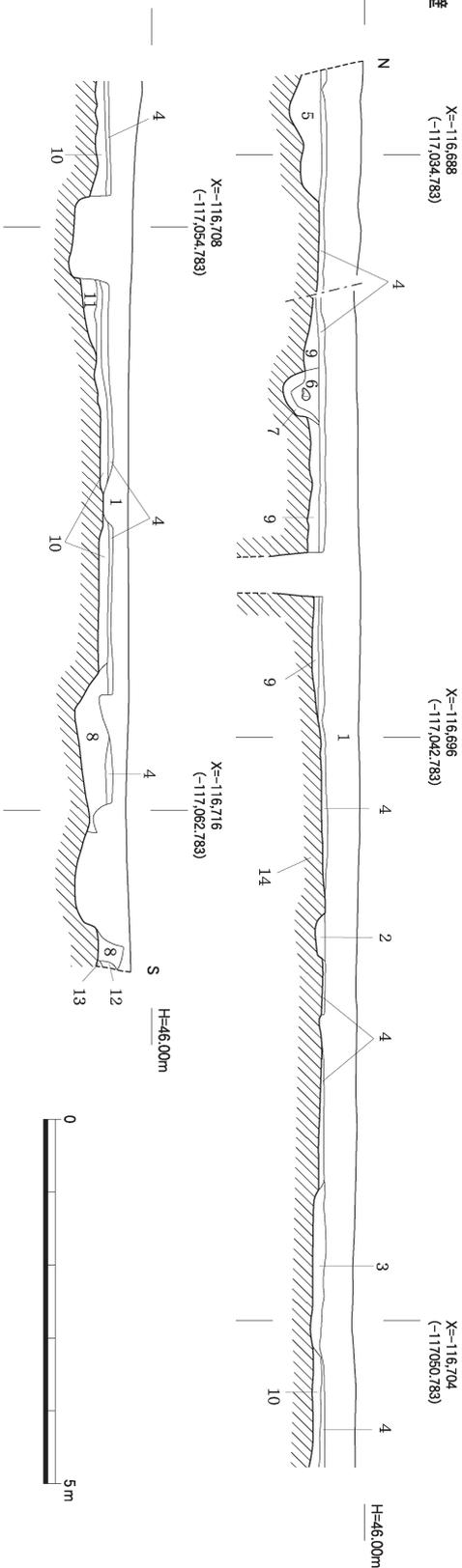
図6 1区第1面遺構実測図(1:200)

北壁



- 1 盛土および耕土
- 2 10YR6/3 にぶい黄褐色泥砂 (床土)
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂、φ 1～3cm 礫混
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂
- 5 7.5YR4/4 褐色泥砂
- 6 10YR3/4 暗褐色砂泥、φ 10cm 礫少量混
- 7 10YR3/4 暗褐色粗砂、φ 3cm 礫混
- 8 10YR5/6 黄褐色泥砂、φ 3～10cm 礫混
- 9 10YR2/3 黒褐色砂泥、φ 3cm 礫混
- 10 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 (石組土層72)
- 11 7.5YR5/4 にぶい褐色砂泥、φ 3～10cm 礫混 (石組土層72)
- 12 7.5YR5/4 ～5/6 にぶい褐色～明褐色砂泥、φ 15cm 礫混 (石組土層72)
- 13 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
- 14 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥、φ 20cm 礫混
- 15 10YR4/4 褐色砂泥
- 16 10YR3/2 黒褐色砂礫
- 17 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂
- 18 10YR4/2 灰黄褐色砂礫 (地山)

東壁



- 1 盛土および耕土
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、φ 1～5cm 礫混
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂、φ 1～36cm 礫混
- 4 10YR6/3 にぶい黄褐色泥砂 (床土)
- 5 10YR3/2 黒褐色砂礫
- 6 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ 5～15cm 礫少量・土師片混 (土層201)
- 7 10YR4/6 褐色砂泥 (土層201)
- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥、φ 1～10cm 礫多量混 (落込み4)
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ 3～5cm 礫中量混 (古墳時代包含層)
- 10 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、φ 1～3cm 礫・灰化物混
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ 1～5cm 礫多量混
- 12 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
- 13 10YR4/4 褐色砂泥、φ 1～5cm 礫多量混
- 14 10YR4/2 灰黄褐色砂礫 (地山)

図7 1区北壁・東壁断面図 (1:100)

各時代の遺構は、中央から南では地山を切り込んで検出しており、北部では中世から江戸時代の遺構は整地層上面から、古墳時代の遺構はこの整地層下の地山上面で検出している。

なお調査は、江戸時代前期までの遺構を第1面とし、それ以前の遺構を第2面として行った。

検出した遺構は、古墳時代前期と後期の土壙、長岡京期の建物・柵列、室町時代（14世紀～15世紀初頭頃）の柱穴群・土壙、江戸時代前期の建物、江戸時代後期の井戸・土壙・溝などがある。

2区の基本層序は、2-1区、2-2区とも基本的に変らない。約20cmの近・現代の耕土層と5cm程の床土の下層は、黄褐色泥砂層の地山となる。ただ、調査地の南東隅に設定した2-2区では、2層の耕土層が確認できたが、下層の耕土層でも時期差はない。

(2) 遺 構

1) 1区の遺構

古墳時代前期（図5、図版2-1）

古墳時代の遺構は、すべて調査区の北半で検出している。

土壙201は、幅約0.7m、深さ約0.5mの溝状の土壙で、調査区北東隅で約2m検出した。調査区外に延びるため全容は不明である。出土遺物は前期の土師器の甕・高杯などがあるが、小片がほとんどである。

土壙204～206は、いずれも直径約0.3m、深さ約0.1mの浅い皿状を呈した土壙である。土壙206はやや離れた位置にあるが、土壙204と土壙205（図8・9）は比較的隣接している。後世の削平を受け残存状況は悪いが、それぞれに1個体の小型甕を横向きの状態で検出し、それ以外の出土遺物はなかった。土壙204出土の甕がやや新しい様相であるが、いずれも前期のものである。小規模な土壙に、1個体分の甕が出土する例は、何らかの埋納施設あるいは竪穴住居の貯蔵穴などの残欠とも考えられるが、共伴する遺物もなく不明である。

古墳時代後期（図5、図版2-1）

土壙223は、中世の土壙210の下層で検出した。径約1.5mの不正円形で、深さ約0.5mある。

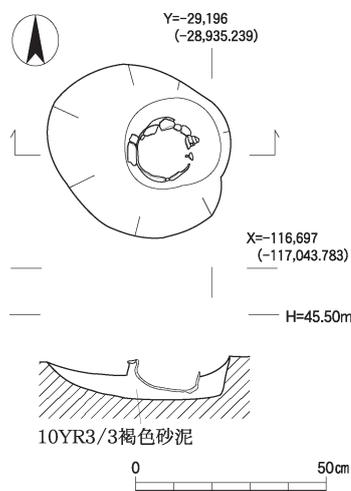


図8 土壙205実測図（1：20）

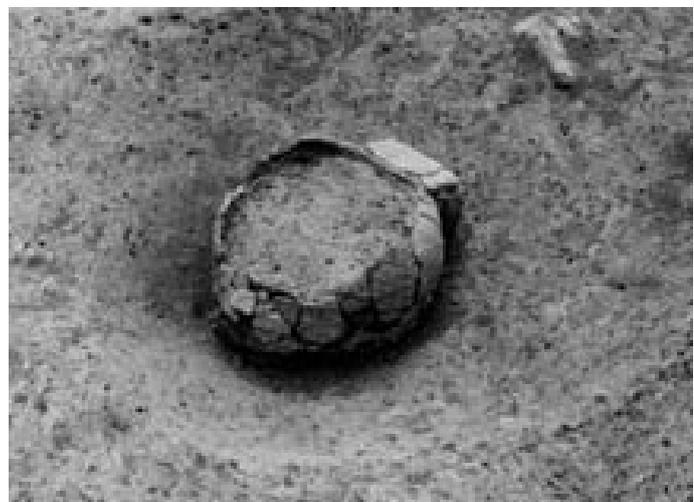


図9 土壙205甕出土状況（北東より）

出土遺物は少ないが、6世紀中頃の須恵器の杯と杯蓋が出土している。今回の調査では、唯一の6世紀代の遺構である。

長岡京期（図5、図版2-1）

長岡京期の遺構には、建物と柵列、および小規模な溝と土壇などがある。

建物2（図10、図版2-2）は、調査区中央部東端で検出した。検出した柱穴は4基1列で、柱間は北から1.75m、1.65m、1.8mを測り、柱穴は0.5～0.7mの隅丸方形、深さは0.2～0.4mである。2間×3間の南北建物の西側柱列と推定した。柱穴からの出土遺物は、土師器の細片のみで時期決定できるものはないが、柱穴の規模と建物方位が正方位に近いことから、長岡京期の建物と推定しておく。

柵列3（図10、図版2-2）は、建物2の西約3.3mで検出した南北の柱穴列である。検出した柱穴は、建物2と同じ4基で、柱間は北から1.4m、1.7m、1.9mを測り、柱穴は0.5～0.6m

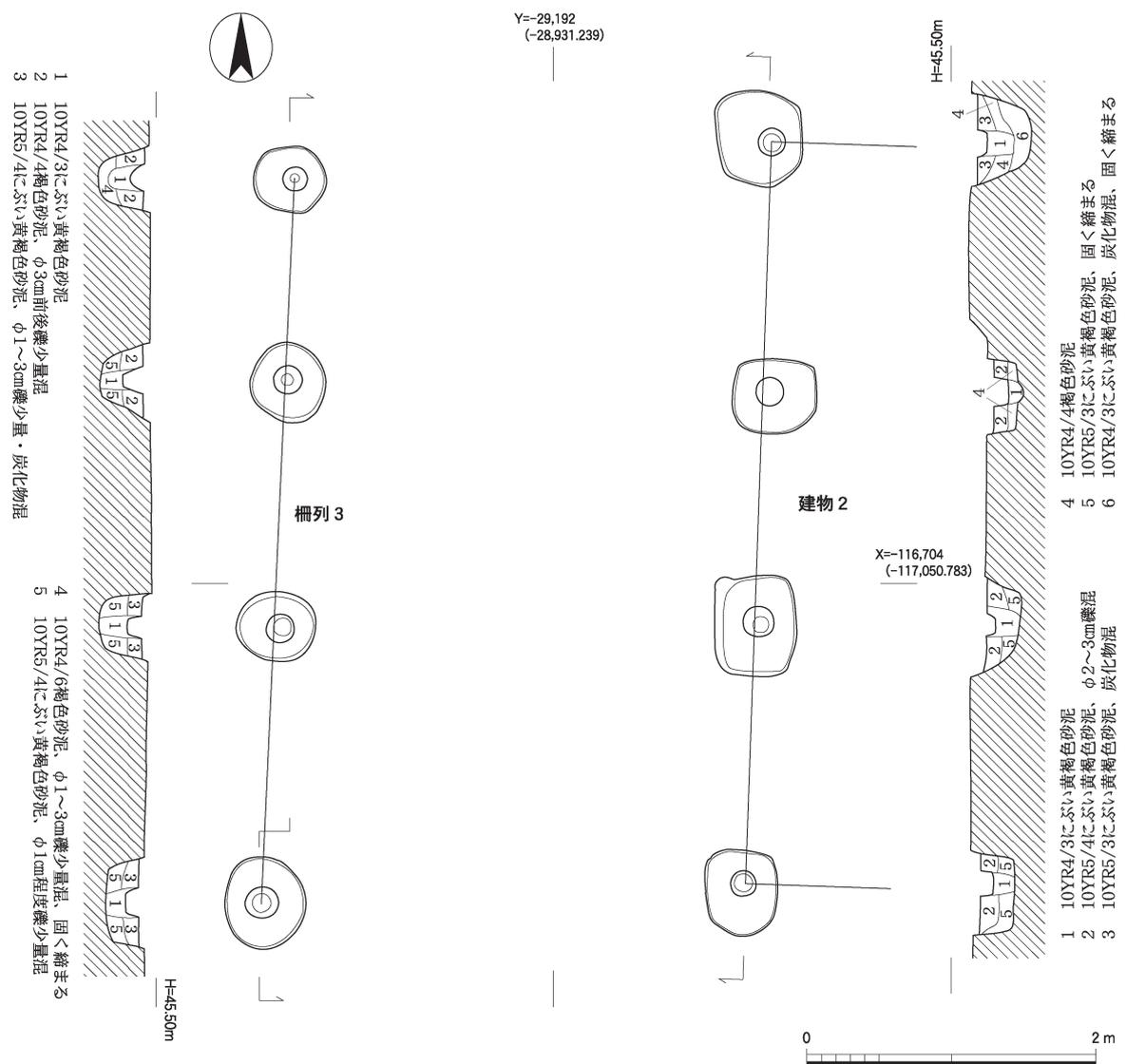


図10 建物2・柵列3実測図（1：50）

の円形で、深さは0.25～0.4mである。建物2との間隔が広く、柱穴の掘形が円形で、やや規模が小さいことから、建物2に伴う目隠堀的な施設と考えられる。

鎌倉時代から室町時代（図5、図版2-1）

鎌倉時代から室町時代の遺構には、調査区内で検出した柱穴の大部分が含まれると推定されたが、建物としてまとまる柱穴はなく、明確な遺構としては調査区内中央西寄りで径約6.0m、深さ約0.5mの不正円形の土壌を検出したにとどまる。周辺を広範囲に整地した際の整理土壌と推定されるが出土遺物が少なく、平安時代末～鎌倉時代初頭頃から室町時代のものまであり、時期が確定できない。ただし、14世紀代の瓦器・輸入白磁の小片などが含まれており、これが遺構年代の下限と推定される。

江戸時代（図6、図版1-1）

江戸時代の遺構は、前期から幕末期のものまで、調査区全域で多く検出した。

前期の遺構には、建物、石組土壌などがある。

建物1（図12、図版1-2）の柱穴は、攪乱などで不明な部分が多いが、東西4間（4.8m）×南北3間（4.0m）の東西棟に復元した。柱穴は径0.3～0.45mの円形で、深さ0.15～0.3mある。柱間は不揃いで、作り替えられた可能性もある。柱穴が揃う西側の柱間は、北から1.2m、1.2m、1.35mである。出土遺物が少なく時期を決定しづらいが、周辺の調査では中世期の建物は北に対して西に10°程度傾くことが指摘されており、建物1がほぼ正方位であること、柱穴出土遺物に江戸時代前期以後の遺物が見当たらないことなどから、前期頃の建物と推定する。

石組土壌2（図11）は、径0.2～0.3m程度の河原石を井戸状に円形に組んだもので、石組の内法は約1.0m、残存する深さは約0.5mである。石組内には人頭大の河原石が雑に入れられていた。同様の遺構は京都市内の都市遺跡でもよく見られ、屋敷地内の中庭などの雑排水施設とも推定されているが、具体的な用途は特定されていない。石組枠内などから、17世紀前半代の陶磁器類が少量出土している。

石組土壌72は、石組土壌2と同様に石組で構築されたと推定される遺構である。中央が大きく攪乱され、石組も西側の基底部が残るだけである。残存する規模は掘形で、東西約2.8m、南北2.8m以上ある。掘形から瓦器碗が出土したが、遺構に伴うものではなく、周辺の中世期の遺構からの混入である。

江戸時代中・後期の遺構には、屋敷境溝、井戸、「室」と呼ばれる農作物の半地下式の貯蔵施設や、肥溜と考えられる素掘りもしくは漆喰枠の円形土壌などがある。

屋敷境溝50は、断面「U」字形で幅約0.5m、深さ0.15～0.2mで調査区中央を東西にクランク状

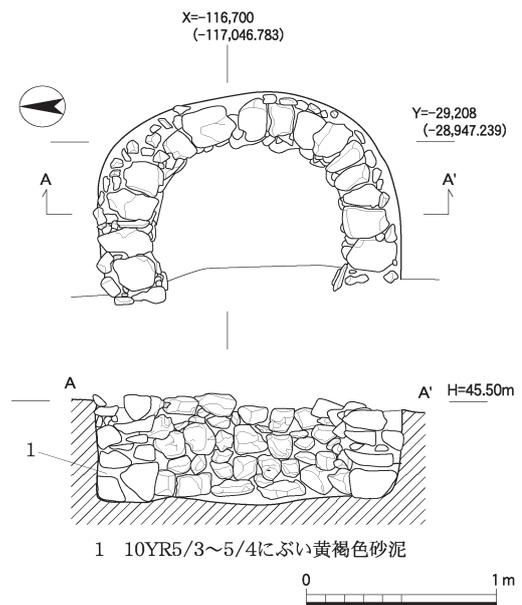


図11 石組土壌2実測図（1：40）

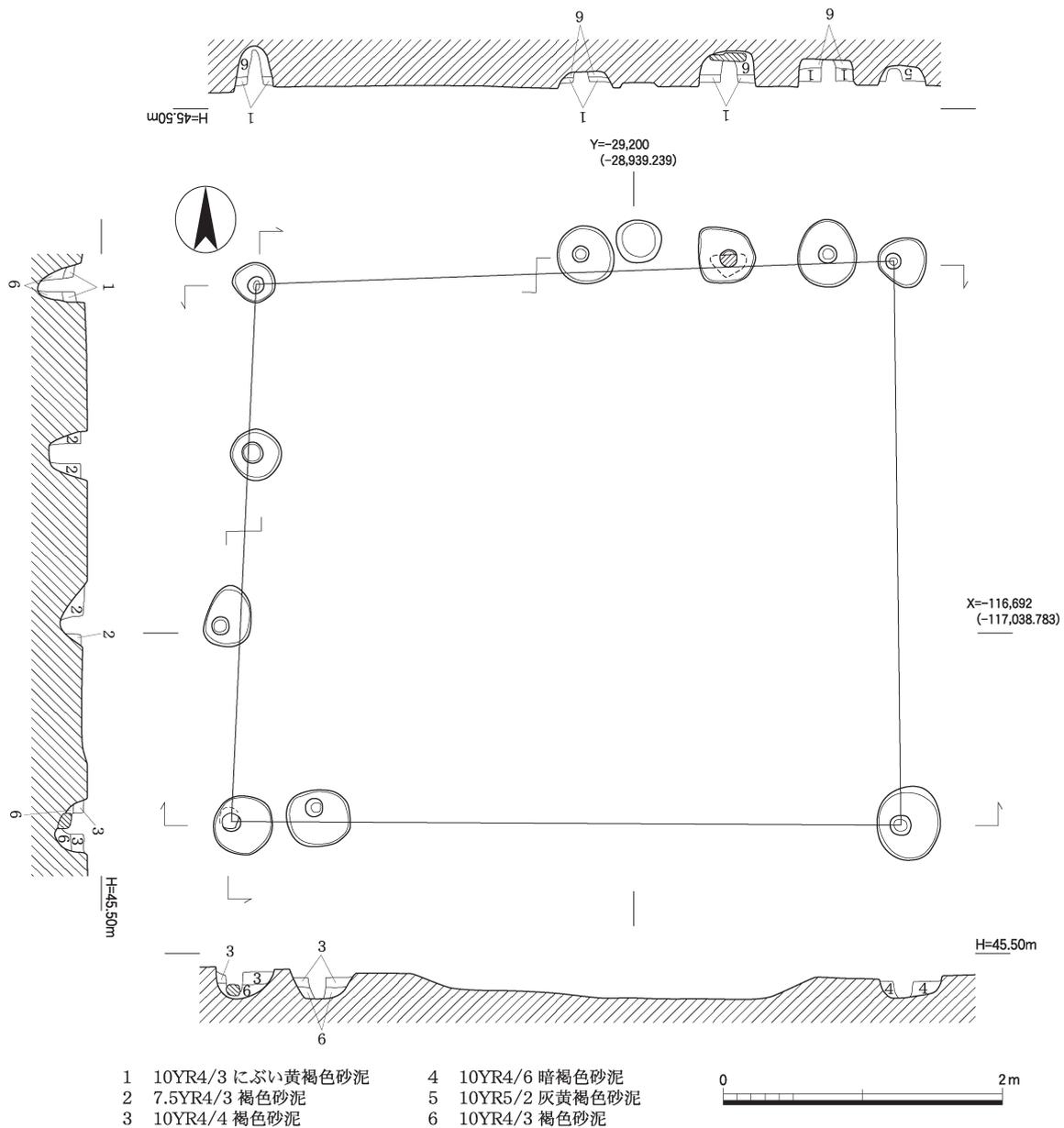
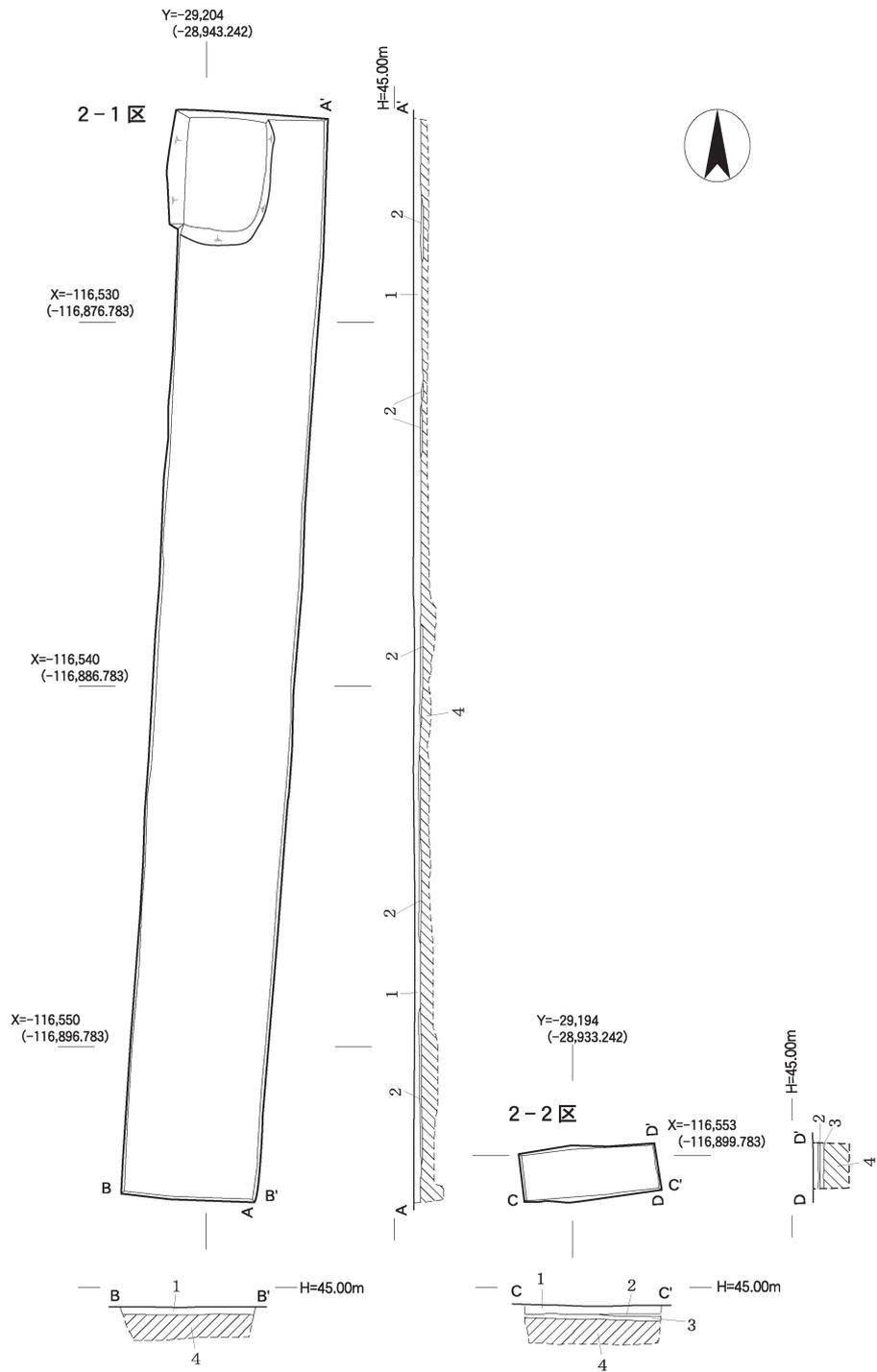


図 12 建物 1 実測図 (1 : 50)

に画する。溝の東側に耕作溝が集中し、西側には井戸、石組土壇、排水溝などの生活施設があることなど、土地利用に違いがみて取れることから屋敷境溝と推定した。18 世紀代の陶磁器類が少量出土した。

井戸 3・150 は、両方とも素掘りで、どちらも約 2.0m 程度掘り下げたが、石組など井筒の痕跡はない。井戸 3 の掘形は直径約 2.3m の円形で、埋土に 19 世紀中頃から後半の陶磁器類がある。井戸 150 の掘形は検出面で長径約 2.5m、短径約 1.9m の楕円形、下層は約 1.9m の円形である。埋土に 17 世紀後半から末頃の出土遺物が含まれている。

落込み 4 は、調査区の南端部で検出した。旧地形が 0.5m 程度下がっており、この部分を落込み 4 として掘り下げている。落込み 4 出土遺物には、弥生土器片から江戸時代後半のものまで含まれており、整地の際の客土に含まれたものと考えられる。19 世紀以降に調査区周辺の宅地を平



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (耕土)
- 2 10YR3/4 暗褐色砂泥 (床土)
- 3 10YR4/4 褐色砂泥 (旧耕土)
- 4 10YR5/6 黄褐色泥砂 (地山)

图 13 2区遺構実測図 (1:200)

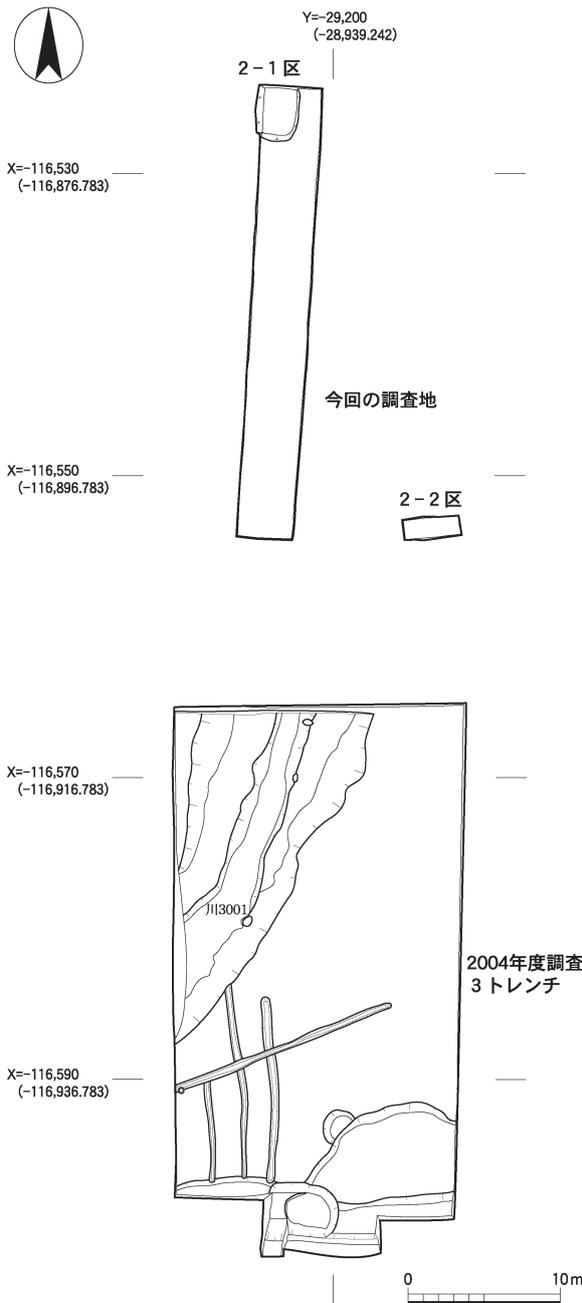


図14 2004年度調査3トレンチおよび
今回調査2区配置図(1:500)

坦化して拡副したものと推定できる。

江戸時代の遺構から出土した遺物は、中期から後期のものが大半であるが、17世紀代の肥前陶磁器、瀬戸・美濃系陶器なども含まれており、調査区周辺では石見城が廃絶した後も、江戸時代を通して農村集落が形成されていたものと思われる。

2) 2区の遺構(図13、図版3)

2区は前述の通り、2004年度の調査で検出された、旧善峰川の広がりや石見城跡に関連する遺構の広がりを確認するために設定した。現在の善峰川右岸と2004年度調査の3トレンチ間の道路予定地である。3トレンチと今回調査した2-1調査区の間には、現行の農道が横断しており約10m離れている。3トレンチで検出されている「川3001」が北東方向かっているのが読み取れ、今回調査した2区でもその延長が確認できると予想された(図14)。しかし、調査の結果2-1・2-2区のいずれでも自然流路は検出されず、耕土・床土の下は比較的安定した無遺構・無遺物の地山層であった。また、2-2区では確認のため-2m程度まで重機で掘り下げたが、堆積状況に変化は見られなかった。

「川3001」が自然流路であれば、今回調

査した地点で確認できないのは想定しづらく、「川3001」が石見城の北西隅を画する濠の北端部であった可能性も含めて、再考を要する調査結果となった。

4. 遺物

1) 1区の遺物(図15、図版4)

出土遺物は整理箱にして22箱分出土しており、瓦類や銭貨などの金属類もあるが、土器・陶磁器類がほとんどを占める。弥生時代から近世後期にわたる各時代のものが含まれているが、江戸

時代の陶磁器類が大部分である。なお、弥生土器は遺構に伴うものではなく、近世後期の整地層と推定した落込み4から出土している。遺構に伴う遺物として、最も古いものは古墳時代前期のものである。以下に時代順に概述する。

古墳時代（1～5）

調査区北部で検出した土壙204～206から、それぞれ各1個体ずつ小型甕が出土した。本来は完形、もしくはそれに近い甕であったと思われるが、後世の削平を受け遺存状況が悪く、表面の風化も進んでいる。1は土壙204出土の甕で、受口状の口縁端部と底部破片から推定復元した。表面の調整は風化が激しく不明である。2は土壙205出土の甕で、口縁部はくの字状で、頸部から下はタタキ目を施す。胴部の最大径付近より下は、使用により表面が剥落する。内面はハケ目調整痕が残る。3は土壙206出土の甕の底部で、外面はハケ目調整で。内面は斜方向のケズリ痕が残る。1の甕がやや新しい様相であるが、いずれも古墳時代前期の4世紀前半頃のものである。

また、土壙201からは土師器の甕・高杯類が出土したが、ほとんどが細片で器種を特定できるものが少なく、図示できる遺物はない。

4・5は土壙223出土の須恵器である。4は杯蓋で、天井部と口縁部の境に鈍い稜線を作る。口縁はやや開き気味で、端部は丸くおさめる。5は杯身で、受部からやや外反し、内傾する短い口縁部が立ち上がる。4・5とも焼成が甘く、調整は不明である。

長岡京期

長岡京期と推定した建物跡などの遺構からは、目立った遺物は出土していない。平瓦や土師器・須恵器の小片が、主に調査区南部の落込み4から、近世の遺物と混在して出土したが図示できるものはない。

鎌倉時代から室町時代（6～11）

主に13世紀以降のものが中心で、それ以前のもの少ない。瓦器椀が主体で、常滑産の焼締陶器、輸入青磁・白磁などが少量含まれている。中世期と思われる柱穴から出土した土師器や陶磁

表3 1区遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器1点		
古墳時代	土師器、須恵器		土師器3点、須恵器2点		
長岡京期	土師器、須恵器、瓦				
鎌倉時代～室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器（青磁・白磁）		土師器1点、瓦器5点、中国磁器2点		
江戸時代	土師器、土師質土器、土製品、陶磁器、輸入磁器、瓦、銭貨など		土師器1点、磁器3点、陶器10点、土製品1点、銭貨1点		
合計		22箱	30点（2箱）	4箱	16箱

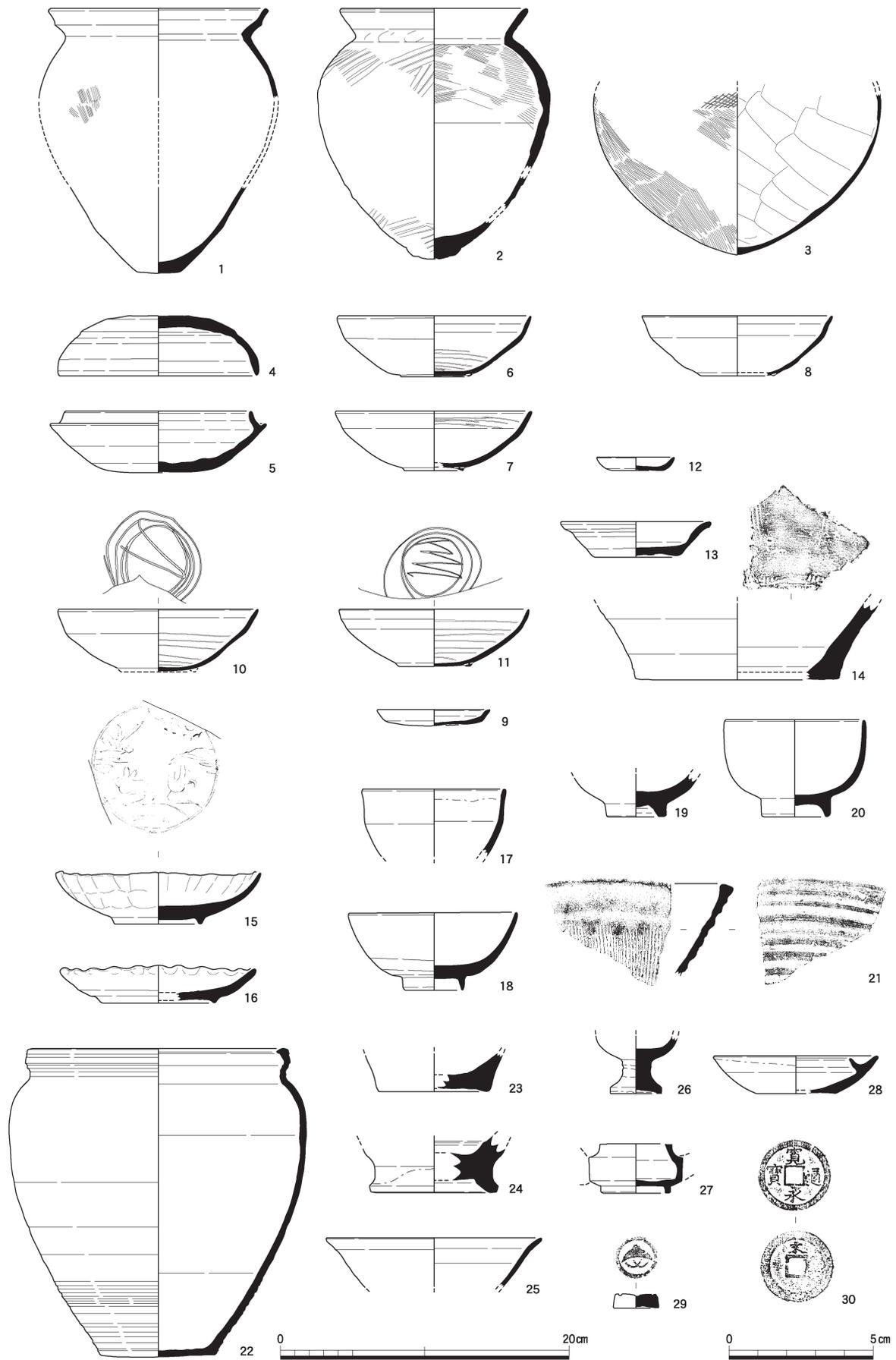


図 15 出土遺物拓影・実測図 (22は1:8、30は1:2、他は1:4)

器もあるが、小片がほとんどで年代を特定するのは困難である。江戸時代の耕作溝や井戸に混入して出土したものも多いが、いずれにしても総量で整理箱に1箱程度であり、遺構密度に比例して量的にも少ない。

遺構に伴うものには土壙210出土資料がある。9は土師器皿で、口径7.8 cm、器高1.2 cm。平坦な底部から口縁部にかけて、屈曲して立ち上がる。10・11は瓦器椀である。内面から見込まで連続したラセン状のヘラミガキで、中央にジグザグ状の暗文を施す。外面は口縁端部にナデの痕跡が残る。

6～8も瓦器椀であるが、江戸時代前期の土壙72の掘形に混入していたものである。表面の磨滅が進んでおり、調整などは不明な点が多いが、土壙210出土資料とほぼ同様である。口径13.2～13.8 cm、器高4.0～4.4 cmの間に収まる。13世紀前半頃と思われる。

江戸時代（12～30）

江戸時代の遺物は調査区全域から出土しており、江戸時代前期から幕末期まで江戸時代を通じて確認された。

12～14は、石組土壙2から出土したものである。12は土師器小皿で、口径5.4 cm、器高0.9 cm。13は瀬戸・美濃系の鉄釉皿で、底部と見込に重ね焼の痕跡が残る。14は信楽産の播鉢底部である。17世紀初頭～前半頃のものである。

15～17は土壙70出土遺物である。15は肥前系磁器皿で、高台の畳付を除いて全面施釉される。見込には草花に、雁のような鳥を描く。16は瀬戸・美濃系の鉄釉輪花皿で、見込と底部に輪トチ痕が付く。17は肥前系青磁椀で、外面に青磁釉が掛けられている。17世紀中頃のものである。

18は屋敷境溝50出土で、肥前系陶器の刷毛目椀である。見込蛇ノ目釉ハギされる。17世紀末～18世紀前半頃の製品である。

19～21は井戸150出土で、19・20は肥前系陶器である。19は鉄釉椀、20は小型の呉器手椀である。21は信楽播鉢の口縁部で、内外面に鉄釉が掛けられる。17世紀末～18世紀前半頃の製品である。

22は土壙51の底部に据えられていた信楽産の甕である。口径36 cm、底径15.8 cm、器高41.2 cmで、中型の鉄釉製品である。口縁部の形状などから、18世紀代のものである。

落込み4（23～30）

23～30は落込み4出土のもので、23の弥生土器底部から27・28などの19世紀半ば頃まで幅広い遺物が含まれる。弥生土器底部と推定した23は、2次的なローリングのため内外面とも器壁の表面は残存していない。24は中国製の白磁壺底部である。25は同じく白磁端反椀の口縁破片である。どちらも小片のため不明な部分が多いが、13世紀代の製品と思われる。26は肥前系磁器の仏飯器である。18世紀代のものである。27・28は京・信楽系陶器のひょうそくと灯明受皿である。27は19世紀、28は18世紀代の製品である。29は丸に笠文の泥面子である。30は寛永通寶のいわゆる文銭である。

5. ま と め

今回の調査での特筆される点は、長岡京期と推定される建物・柵列が検出されたことが挙げられる。調査区の北側で行われた長岡京 R831 次調査では一条条間大路に関連する遺構は検出されていないが、長岡京期に調査区周辺まで何らかの土地利用が行われていたと推定される。

大原野石見町遺跡に関する遺構としては、古墳時代前期と後期の土壌がある。小規模な土壌の検出であったが、周辺に古墳時代の遺跡が展開していることが窺えよう。

また、中世の石見城に関連する明確な遺構は検出できなかった。しかし、中世期に遡ると考えられる柱穴群や江戸時代の遺構や整地層から、一定程度瓦器碗や輸入陶磁器などが出土している。調査地周辺が石見城廃絶以降も近・現代まで一貫して農村集落が形成されており、その過程で中世期以前の遺構が削平されたものと考えられる。

調査地を含めた周辺の地域が、古墳時代から長岡京、中世から近世を通じて連綿と集落が形成されていたことが確認できた意義は大きいと考える。

註

- 1) 長岡京の調査については、長岡京連絡協議会により調査次数の前に、宮は P、右京は R、左京は L を付し、連続した調査番号で表記することとなり、本書でもこれに準ずる。
- 2) 百瀬正恒・網 伸也『長岡京右京一条四坊十三・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-2 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2003 年
- 3) 南 孝雄・清藤玲子『長岡京右京一条四坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-15 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2005 年
- 4) 加納敬二ほか『長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-3 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2003 年
- 5) 網 伸也・百瀬正恒『長岡京右京二条四坊一町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-4 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2003 年
- 6) 註3に同じ

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょううきょういちじょうしぼうじゅうよん・じゅうごちょうあと							
書名	長岡京右京一条四坊十四・十五町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-22							
編著者名	能芝 勉・田中利津子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょううきょう 長岡京右京 いちじょうしぼう 一条四坊 じゅうよん・じゅうごちょう 十四・十五町 あと 跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 おおはらのいわみちょう 大原野石見町 ちない 地内	26100		34度 56分 51秒	135度 40分 49秒	2006年6月 29日～2006 年9月11日	約716㎡	道路新設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京右京 一条四坊 十四・十五町 跡	都城跡	古墳時代	土壙	土師器、須恵器				
		長岡京期	建物、柵列	土師器、須恵器、瓦		長岡京の建物跡・柵列を検出した。		
		鎌倉時代 ～室町時代	柱穴、土壙	土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器				
		江戸時代	建物、井戸、石組 土壙、屋敷境溝、 耕作溝、土壙	土師器、土師質土器、 国産陶磁器、輸入磁器、 瓦、銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-22
長岡京右京一条四坊十四・十五町跡

発行日 2007年3月30日

編集

発行所 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の1

〒602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒604-0093 TEL 075-256-0961